

東寮解体工事の一連の写真を見て

東京女子大学の東寮の解体工事を写した一連の写真を見た所感を述べさせていただきます。写真は、解体工事半ばで、構造体の姿が顕わになっていました。それは昨年12月2日に、東女レーモンドの会主催で行われた緊急シンポジウムで説明のあった通りの明快な構造方針を示しております(全記録冊子「東京女子大学レーモンド建築 東寮・体育館を考える」参照)。中庭を囲む口の字型平面の建物の外壁部分と床を鉄筋コンクリートで造り、日本式木造小屋組で屋根を掛けたもので、建物を如何に軽く、強く、経済的で、日本の女子大生のヒューマンスケールに合わせるかに配慮がなされています。例えば、二階床はジョイストスラブ状に小梁を細かく並べ、その間にボルト状にコンクリートを打つことで階高を低く抑え、二階の窓の上にある底は梁と一体化させて水平剛性を高める工夫をしております。

環境問題が重視されている昨今、建築物を容易に解体できることも建物を評価する上で、一つの重要なファクターになっております。材料別に部材を取り外しリサイクルの供することが容易であることも重要な要因になりますが、壊すためのエネルギーを削減することも重要と考えられるようになってきております。

建物の解体が容易であることと、建物が耐震的に弱いことは別のことです。解体の面から言えば、一般的に木造の建物は鉄筋コンクリートの建物より容易ですが、木造の建物の方が構造的に安全性が小さいかということそんなことは全くありません。解体の容易性から建物の耐震

強度に話を短絡させることは論理的でないというそしりを免れないこととなります。寧ろ東寮の建物のような軽やかで無駄を省いたシンプルな構造体には合理性からくる美しさを感じられます。

多くの方々が東京女子大の将来を考えて、東寮の保存に真剣に取り組んだことを考えますと、今回の解体理由となった材料劣化や耐震強度不足について本当に妥当な判断であったのかどうかの検証を行い、その結果を示すことが最善の説明方法だと考えられます。

材料劣化については、解体時に発生したコンクリートや、鉄筋の解体材を用いて、大学や工業試験所等の機関に依頼すれば、中性化の程度や鉄筋の腐食率などの調査が可能で、その結果を公表すべきではないでしょうか。同様に瓦や屋根の木材、ボルトなども、建物が使えないほどの劣化があったと言うためには、



関連写真



関連写真

材料試験に供し劣化の程度を分析し試験結果を示して頂かないと納得しがたいものがあります。

耐震強度不足の論拠については、耐震診断書を再検証すべきではないかと考えられます。解体によって詳細がはっきりしたわけですから、計画時に構造事務所が採用した材料強度や劣化度の仮定値の妥当性、鉄筋などの配筋設計、入念に軽量化設計された骨組みの解析手法など、構造診断者の責任において、再検討を加えてその結果を公表すれば学術的に貴重な資料となります。教育機関として是非ともやっていただきたいことだと思います。

また、東京女子大学の建学の精神を通しての東寮の教育的な意義、建築学的な価値などを考えますと、専門家から成る学術記録保存のための委員会を組織して、記録保存のための報告書が作成されるべきだと考えられます。これは文化の担い手である大学として最小限の義務ではないでしょうか。

以上、解体時の写真を見ながら考えたことです。

2007年9月15日

西澤 英和(関西大学 建築構造学)

小西 敏正(宇都宮大学 建築構法学)